

「たびとしよCafe」



山口 誠（やまぐち・まこと）

獨協大学外国語学部交流文化学学科教授。
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（社会情報学）。
専門は観光研究、メディア研究、歴史社会学。
主な著書に『ニッポンの海外旅行』（筑摩書房、2010年）、
『グアムと日本人』（岩波書店、2007年）、
『英語講座の誕生』（講談社、2001年）、
『地球の歩き方』の歩き方（共著、新潮社、2000年）など。

「ツーリズム・リテラシー
という考え方
〜産官学の連携と
新たな観光文化の創出〜」

2018年2月8日（木）、第12回た
びとしよCafeを開催しました。

ゲストスピーカーに獨協大学外国語学
部交流文化学学科教授の山口誠氏をお招
きし、「ツーリズム・リテラシーとい
う考え方」〜産官学の連携と新たな観

光文化の創出〜というテーマでお話
いただきました。

ツーリズム・リテラシーは山口氏を
はじめ、同学部准教授の鈴木涼太郎氏
や須永和博氏との共同で構想している
概念です。山口氏は、旅は誰もが自然

にできるようになるものではなく、歩
くこと、話すことと同様に何年もかけ

て意識的に学ぶものであると言います。
産官学のそれぞれの立場が旅や観光を
多角的かつ批判的に捉えることで、よ
りよい観光文化を探求するためのルー

トがあるのではないかという仮説のもと、今回はその試論についてお話いただきました。

当日は26名の方にご参加いただき、第一部の山口氏からの話題提供の後、多くの質問が寄せられました。

【第一部】 話題提供

●「旅行」と「観光」は使い分けられているものもあるが、その違いは明確ではなく、混在して使われているものもある。「旅」の歴史は長いが、その一種である「観光」は19世紀に整備されたマス・ツーリズムが原点になっている。近代における工業化や技術化、大衆化などを背景に生まれた特殊な社会的行為が「観光」であり、社会的に習得された「不自然な行為」であるとも言える。

●リテラシーの原義は読み書き能力や識字率であるが、人間の行為のすべてが習得とリテラシーの対象になる。観光の分野においても「観光」を自明視せず、その「かたち」や「文法」を意識化し、批判的に考察し、再編するための技法と学知を構想できないだろう

かと考えたのがツーリズム・リテラシーである。

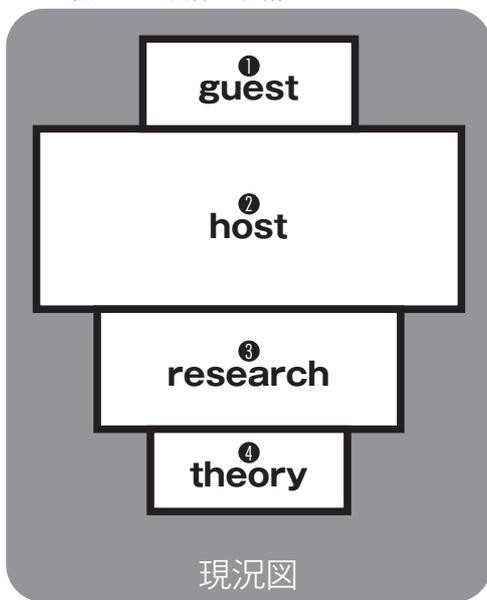
●ツーリズム・リテラシーは、メディア・リテラシー研究の成果を参照したアイデアであり、実践のためのスキルと考察のための理論の2つの要素で構成されるもので、たとえば観光研究が実践の場に対して観光文化を促進するための理論を提供するなど、実践と理論をつなぐ役割を果たせるのではないかと思っている。その意味で「観光に特有な「観る」ことと「考える」ことを実践するための方法と知であり、その習得により社会と自己を相対化し、新たな可能性と多様性を生み出すための教育と研究である」と定義することができる。

●ツーリズム・リテラシーを構成する4層として、①観光で観る ゲスト(guest)のリテラシー、②観光を観るホスト(host)のリテラシー、③観光で考える 観光研究(tourism research)のリテラシー、④観光を考える 観光理論(tourism theory)のリテラシーの4つに整理している。現在の観光研究では、②観光を観る ホスト(host)のリテラシーや、③観光で考える 観光研究(tourism research)のリテラ

シーに関する成果は多く見られるが、①観光で観る ゲスト(guest)のリテラシーや、④観光を考える 観光理論(tourism theory)のリテラシーについては成果が少ないため、この2つの層の充実化を図ることが重要であると考えている(図1)。

●産業界はホストのリテラシーのみならずゲストのリテラシーの充実につとめ、学界は観光研究のリテラシーに加え観光理論のリテラシーの充実につとめることが有効であると考えられるが、その際に行政や公益財団法人などが両者を結ぶプラットフォームを提供していくことで新たな観光文化の創造

図1 ツーリズム・リテラシーの構成と射程
(山口氏発表資料より抜粋)



ツーリズム・リテラシーを構成する4層

- ① 観光で観る ゲスト(guest)のリテラシー
- ② 観光を観る ホスト(host)のリテラシー
- ③ 観光で考える 観光研究(tourism research)のリテラシー
- ④ 観光を考える 観光理論(tourism theory)のリテラシー

※各層は相互に関連するため、複数の層に関わる事例も多い。

へとつながる可能性がある。あわせて、観光振興を目指す産業系観光教育（第2層）と、観光の諸問題を問う批判的観光研究（第3層）の媒介としてゲスト（第1層）と観光理論（第4層）を整備することも考えられる。

● ツーリズム・リテラシーの4層を複合的に実践する一例としては、たとえば旅の図書館が収蔵する100年あまり前の訪日ガイドブックや雑誌『ツーリスト』の記事を分析し、「100年前の観光」を追体験し、その観光的想像力を「観る」というプログラムが考えられる。たとえばかつてガイドブックに頻繁に掲載されていた東京における「芝」エリアを題材とした場合、実際に現地をフィールドワークし（第1層）、それに基づき、芝の魅力を発信するガイドブックのような記事を執筆し発表する（第2層）。その上で、観光資源としての芝がガイドブックから消えていった理由を分析し（第3層）、批判的考察をおこなう（第4層）ということを考えている。これにより、観光の変化を自ら発見し、そのメカニズムを考察するための良いレッスンになるため、私のゼミで実践させていたどころか思っている。

【第2部】 意見交換

参加者：観光を学生に教える際に難しいと感じるのは、何を学ばせたらよいかである。特にテーマをどう見つけるかという点と、学生がどう関心を持つかという点が課題になると思うが、もし何か事例があれば教えていただきたい。

山口氏：観光学の特徴は相対化ということが挙げられると思う。

例えば、最初にメガネをかけた日は違和感があるが、観るということが矯正されているにもかかわらず、3日たてば当たり前になってしまう。このように、私たちは普段、プリズムを通して見ているということを意識化するのが観光学であると伝えている。例えば、通い慣れている電車でも、運転手席の後ろに立ってみると普段は気づかなかつたことが見えてくる。その気付きを自分で得られ

るかどうかが観光においては重要であるため、授業やゼミなどで学生たちに発表させている。

参加者：旅行の特徴とは何かとよく聞かれる。文化社会学系の研究分野において、観光を取り扱うからこそ見出せる理論はあるか。

山口氏：旅行は家や車に次いで3番目に高い人生の買い物だと思う。しかし、家や車と大きく違うのは購入後に形として手元に残らないということである。

それでも観光が世界規模の経済を動かしているのは、同じ事を繰り返して過ごしている日常を離脱した時に、自分を相対化し、新しい自分が見えるという他の商材にはない強烈なインパクトがあるからではないか。その先は私自身でも理論化できていないが、たとえばジョン・アーリとヨナス・ラースン著『観光のまなざし』（一財）法政大学出版局、2014）にエッセンスが詰まっていると思う。



参加者：日本では観光という言葉の定義が曖昧であるように感じる。定義が明確にされてからでなければツーリズム・リテラシーという言葉が聞いた時にそれぞれの解釈で理解してしまい、議論が噛み合わないのではないかと。

山口氏：観光もツーリズムもトラベルもトリップもジャーニーも、定義をした方が良いと思うが、学問分野によっても理解の仕方が微妙に異なるので、厳密に定義するのは難しいかもしれない。現場によって言葉の定義が異なるという前提はあるにせよ、定義をすり合わせていく作業自体は面白いと思う。

事務局：ツーリズム・リテラシーを考える際に、観光地や観光産業の立場としてはどういったことを意識していくべきか。

山口氏：観光は遊びやリフレッシュの意味もあるが、新しい発見があったり自分の価値観が変わるような機会にもなる。一方で、若者が海外旅行に行かなくなっているのは若者に元気がなくなつたからではなく、観光の価値や魅力が提供できていないからではないだろうか。観光は人生で3番目に高い買い物であるというインパクトを観光地がより意識して、他地域の真似ではな

いことをやっていく必要があるのではないかと。

観光産業でも特に旅行会社の例で言うと、単に旅行の予約代行をするのではなく旅行会社を通さなければできない経験や価値を提供しうることに意味があると思う。観光地と旅行者をつなぐだけではなく、もつと多様なものをつなぐことで、新しい観光や価値を創造することができるとはなにか。その意味では旅行会社はプラットフォームになりえるし、社会をもつと多様で面白く変えていくエージェントになり得る。

おわりに

終了後、参加者の皆さまからは、「新たな観光文化の創出」に興味があったので参加した。ツーリズムを学ぶという新視点と、4層のものさしを示していただき、大変参考になった。「旅・観光の現場では、それぞれの立場でがんばっているから、ミスマッチが起こっているように感じている。それが、学問



を超えて解決していくことができればと思う。「私自身もツーリズム・リテラシーについて前から考えており、なぜサステイナブルツーリズムなのかという点にも、リテラシーが関わると思っています。「観光の学術的なアプローチとして、リテラシーの観点から観ていくという、大変面白い試みに感じました。」といった感想をいただきました。観光に携わるそれぞれの主体が固定観念にとらわれずに観光を相対化する

こと、さらにツーリズム・リテラシーを意識した現状分析をおこなうことのある観光地づくりにつながる可能性があります。今後、それぞれの主体が何をすべきか、研究と実践をどうつないでいくかという点について、さらに議論を深めたいと感じました。

（観光文化情報センター
旅の図書館長 企画室長 福永香織）